

静内産ミニトマト「太陽の瞳」、史上最高販売金額達成！ 【新ひだか町】

～高温対策実施による、ミニトマトの生産性回復～

静内地区のミニトマトは37戸、28haで栽培が行われているが、平成22年は過去にない高温の影響を受け、出荷量が大きく減少した。

平成23年はこの課題に対処するため、全戸ハウスの施設状況を調査し、妻部換気、遮光資材の利用、石灰塗布など、高温対策の技術指導を強化した。

結果、ミニトマトの生育が順調に推移し、出荷量が前年比113%と増加した。更に販売単価も安定し（平年比118%）、販売金額は過去最高の6億8千万円となった。

1 課題の背景

(1) 平成22年は近年稀に見る高温年

平成22年は全国的な猛暑であり、北海道においても6月～8月にかけての気温が昭和21年以降で最も高くなった（図1）。

比較的冷涼な気候である静内は高温対策が不十分であり、ミニトマトに生育障害が発生した。

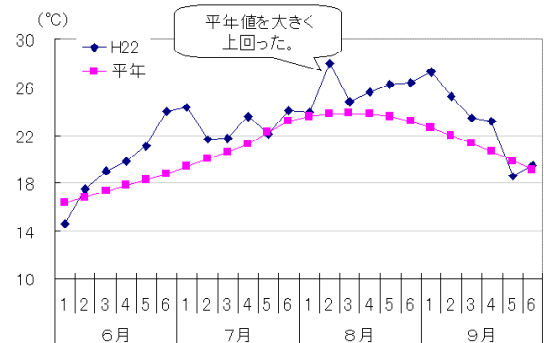


図1 平成22年最高気温の推移（静内）

(2) 高温の影響により出荷量が大きく減少

平成22年は、出荷量が946t（H21年：1,114t）と、前年比85%に減少した（図2）。出荷量減少の原因は、高温遭遇による生育障害（葉の枯れ、落花、カスミソウ状花(写真1)による果実小玉化）及び品質低下（着色不良、ガク枯れ(写真2)）であった。

そのため、平成23年は「ミニトマト出荷量の回復」が重要課題であり、その対策が求められていた。



写真1 高温によるカスミソウ状花

写真2 高温によるガク枯れ

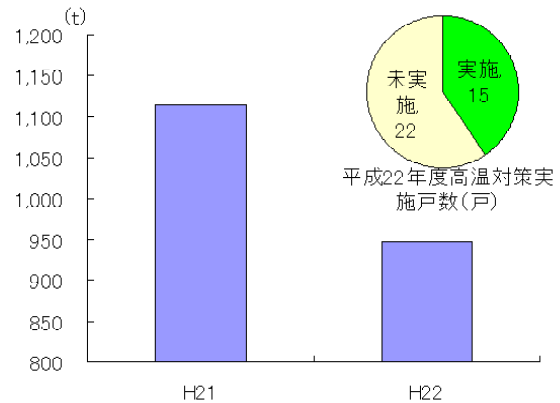
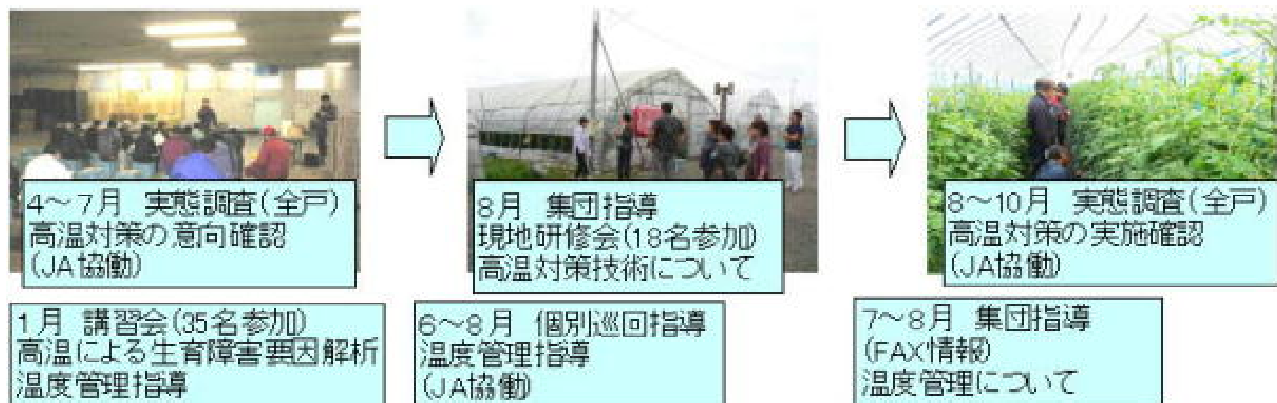


図2 ミニトマト出荷量の年次比較

2 活動の内容



3 活動の成果

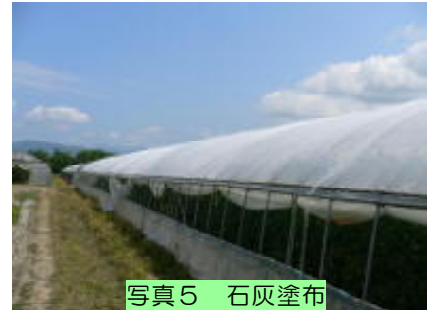
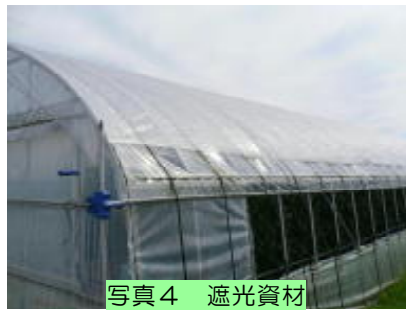
(1) 7戸が新たな高温対策を実施！

平成23年は、4戸が妻部換気（写真3）、1戸が遮光資材（写真4）、1戸が石灰塗布（写真5）、1戸が側窓部換気自動化を実施した（重複含む）。

農家コメント

石灰塗布に取り組んだ結果、ハウス内の光が柔らかくなり、涼しく感じた。

暑さが抑えられたことで、ミニトマトの生育も良好であった。



(2) 出荷量が増加！

本年も各産地が高温に悩まされる中、静内地区は高温対策の実施により、出荷が順調に推移した。

昨年減少した出荷量は大きく回復し、1,067t（前年比112.7%）となった（図3）。

(3) 販売金額が過去最高を更新！

本年は地震及び原発の影響により販売単価が心配されたが、市場における産地間競争がなかったこと、市場との契約販売を推進したJAの販売努力により、6月15日頃から高値安定（554円～790円/kg）が続いた。

静内が出荷のピークを迎える9月下旬～10月中旬頃も販売単価は順調に推移した結果、販売金額は過去最高の6億8,863万円となった（図4）。

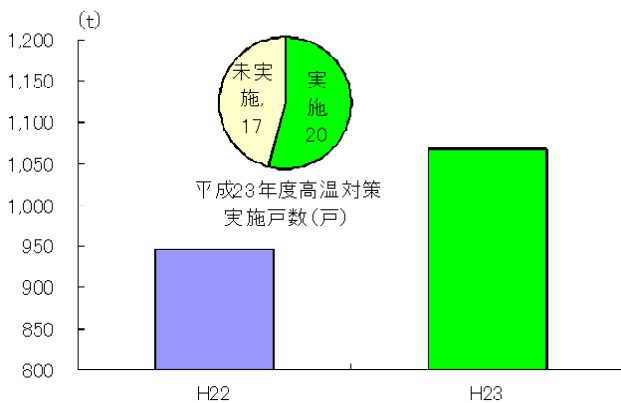


図3 ミニトマト出荷量の年次比較

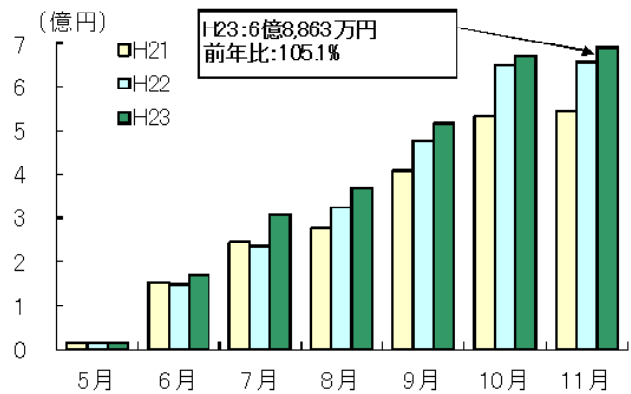


図4 ミニトマト販売金額の年次比較

4 今後の課題

(1) 高温対策技術の普及拡大

高温対策をまだ実施していない農家がいるため、本成績を生産部会へフィードバックし次年度以降の高温対策技術普及率を高める。

(2) 栽培技術の向上による単位面積あたり収量の向上

近年、単位面積あたりの収量は横ばいとなっている。そのため、栽培技術の再検討及び新品種の検討を行い、単位面積あたり収量の向上に取り組む。